最終回コメント（今後のあいちトリエンナーレへの期待）　　曽我部

芸術に関しては全くの素人であるが、近代以前の芸術と現代芸術との違いの１つは、前者がすでに形式として分類整理され、また評価も安定しているのに対し、後者はそうではなく、そもそも「それが芸術なのか」といった議論が生じるほど不定形なものであるということだと思う。そして、例えば印象派が、産業革命を受けて勃興したブルジョワジー的、近代合理主義的な価値観とマッチして人気を博し、それによって芸術が社会全体の近代化を進める一助となったように、近代以前の芸術が、時代の雰囲気に影響されつつ、時にはそれを通じて社会に新たな価値観や変革をもたらしたように、現代芸術も、社会を変える潜在力を秘めている。

第一次提言の「３．今後のあいちトリエンナーレへの期待」の中で述べられていることは、まさにこうした見方を反映しているものだと思われる。現在、社会は大きく変わりつつある。テクノロジー的にはデータドリブン社会への劇的な移行が始まりつつあり、それが人々の生活や働き方、経済構造など多方面に影響を及ぼすことになる。また、多様な人々の存在に正面から光が当たりつつあり、第一次提言にあるように社会的包摂という観点が重要になってきている。

このような大きな社会変革に当たり、あるいはその光を示して変革を推進し、あるいはその影を可視化して警鐘を鳴らす現代美術の役割は、非常に大きい。しかし、これまで、現代美術は人々の関心をそれほど集めていなかったところであり、あいちトリエンナーレのような大きな舞台で現代美術を柱として取り上げることにはまことに大きな意義がある。

もっとも、今見た現代美術の意義は、見方を変えれば既存の価値観を揺るがすということでもあるから、時には軋轢も生むし、また、一般的には関心が高いとは言えないのであるから、これを大きく取り上げるには工夫も必要であって、要するに現代美術を柱として取り上げるにはしっかりした体制と揺るがない決意とが必須となる。

その意味では、今回の第一次提言における「３．今後のあいちトリエンナーレへの期待」と、「４　今後に向けた運営体制のあり方」とは不可分一体のものであると言え、関係各位においては、双方を車の両輪として次回以降に向けてご尽力いただくことを期待したい。